

## 鳥取県浦富のサマー・キャンプ

渡 辺 久 雄

山陰本線が兵庫県境をトンネルで抜けて、鳥取県下に入って二つ目の駅が「いわみ」(岩美)である。ここで下車して三キロ足らずの距離を北に進むと海岸に出る。ここが「浦富海岸」なのである。現在では「山陰海岸国立公園・海中公園」(昭和三十八年・昭和四十六年指定)の主要な部分を構成する観光地であり、戦後には夏期の別荘地として開発された所である。ところが大正期の末から昭和の初年にかけてここで米国伝道団によるサマー・キャンプが催され、それがこうした海岸地開発の先駆となったことは案外に知られていない。現在でこそ観光地であるが、大正期にいち早くキャンプサイト選ばれた経緯は、どこに在ったのであろうか。その辺の事情から追ってゆくことにする。

これについてまず考えねばならぬ重要な点は、いつ、誰が始めたのかということである。この点に関して、伝道団関係資料のほかは何一つ残っていない。といって歴史的に取り上げる価値がないとして捨ててしまうと、将来に於て調べる手掛すら失われるであろうことは明らかである。このために筆者はあえて、現在の時点でわかっていることだけでも記録して、後世に残しておくことの必要性を思った。

明治・大正期の人びとにとって、現代人が楽しむレジャーは想像もつかぬものであった。いうなれば、当時の日本

はまさに発展途上国の姿であったといえよう。従って今日発展を見ている観光地の幾つかは、当時来日していた外国人によって開発されている。例えば一八八六年(明治十九)、英人宣教師のA・シエウ(Alexander C. Shaw)による軽井沢、一八八八年(明治二十二)、同じく英人宣教師のW・ウェストン(Walter Weston)による日本アルプス、一八九五年(明治二十八)、同じく英人貿易商のA・H・グルーム(Arthur Hasketh Groom)による六甲山の例がある。外国人、とりわけヨーロッパ系の人びとにとり、気温と湿度の高い日本の夏が健康の上に悪影響を与えたにちがいない。それを避ける意味からも、高冷地や海岸で夏の間を過ごすのは当然のことといえよう。神戸女学院の創設時代、タルカット、ダッドレー両先生が夏期に有馬に滞在したことも好い例である。

この様な状況から考えて、浦富海岸が外国人によって初めて見出されたとしても不思議なことではない。又そうした外国人が浦富に近い所の住人であることも自然なことといえる。デフォレスト院長の手記によると、バーネット女史(Eleanor L. Burnett. 一九二〇—一九二八年神戸女学院在職)が浦富で日本最初の女子のためのサマー・キャンプの指導をした人となっており、バーネット女史に協力したのがロックロフ女史(Louise Wrockloff. 一九二二—一九二四年同在職)とメイベル・フィールド女史(Mabel J. Field. 一九二二—一九二四年同在職)であったと誌されている。この記事を信頼すると、浦富におけるサマー・キャンプは大正九年と昭和三年(一九二〇—一九二八)の期間に、バーネット女史の指導のもとに開始されたことになってくる。しかし、はたしてバーネット女史が単独で始めたものなのかどうか、この点にも疑問がある。更にもっと根本的な点に触れると、バーネット女史が神戸から遠距離にある景勝地としての浦富を何故知っていたかの疑問である。

幸いなことに、ごく最近、大正期から昭和初期にわたる宣教師関係の資料を見ることができたので、まずサマー・キャンプ開始前後の状況をこうした資料によって眺めてみよう。

その第一は *Japan Mission News* の第二五巻、一九二一年九月の年次総会の報告記事で、その中に『注目される  
其他の諸活動』という標題で「少年・少女のためのサマー・キャンプをも含めた活動方針が承認された。そして Miss  
Coe, Miss Burnett, Mr. Hackett によつて構成された委員会が、伝道団より今後の研究を委嘱された」と書かれて  
いる。さきのバーネット女史による浦富サマー・キャンプの開始という記事はこれに依つたものであろう。次に注目  
したいのは三委員の序列で、コー女史、バーネット女史、ハケット氏の順であり、まづ先にコー女史を挙げていると  
ころに意味があると思う。同女史に就いては改めて取りあげることにする。次に注意したい点は、この一九二一年  
(大正十)はサマー・キャンプ実施の方針が決まつた年で、開始時期は翌年以後ということになる。

第二の記録は、恐らく最初のサマー・キャンプが実施されたと思われる一九二二年(大正十一)の翌年、一九二三年  
(大正十二)の四月号に掲載されているバーネット女史の「浦富における女子サマー・キャンプ」と題する報告である。  
詳細な引用は避けて、重点だけを紹介してみよう。まず最も重要な点は、さきにも述べたように浦富サマー・キャン  
プは伝道団の夏季の伝道事業の一つであり、各地のミッションスクールの女子学生の有志が、それぞれの学校所属の  
宣教師に引率されて参加する形式になっていた点である。神戸女学院もそうした学校の一つであつたが、参加人員の  
数は最も多かつたようである。また参加した期間も長く、神戸女学院同窓会誌『めぐみ』の記事によると一九四一年  
(昭和十六)迄参加していたことがわかる。

*Japan Mission News* の一九二四年(大正十三)十一月号サマー・キャンプ委員会報告の中に「一九二三年七月に鳥  
取および神戸女学院の学生達によつて催された音楽会を通して集められた基金と、アメリカおよび日本の有志からの  
寄付によつて、最初の恒久的キャンプハウスが建設された。(後略)」とある。また「一九二三年(第二回目)のキャン  
プ期間は七月二十四日～八月七日で、この間四人の外国人教師、三人の日本人教師、二四人の少女達が参加した。少女

達は入居した新しい建物に大喜びをした。しかし教師達は近くの民家に宿泊した。二四人の少女の内訳は、一六人が神戸女学院、一人が大阪の梅花女学校、一人が鳥取から参加した者であった。

こうした少女達のキャンプが終わって後、鳥取の中井牧師指導のもとで二〇人の少年達が一〇日間にわたってこの建物を使い、さらにその後、一人の牧師とその家族がこの美しい場所で二週間の休暇を楽しんだ。八月の末になって、鳥取高等農林の学生一五名がここで二日間集会を持った。(後略)

この報告中、最も貴重な記事は、この年次の会計報告を掲げていることである。

# ○ 会計報告

## 収入

一九二二年より	三三三、九六円	施設費	一九三、〇一
鳥取音楽会	一〇八、三四	印刷・文具費	三四、四〇
個人寄付(日本)	一九五、九二	講師謝礼・其他	一四八、〇〇
個人寄付(米国)	五四七、四四	キャンプ費用	四一七、〇〇
神戸女学院	一七五、七八	修繕費	一一、一〇
キャンプの登記料	五九三、〇〇	管理人へ	一〇、〇〇
医療の払い戻し金	一三、七〇	手持現金	九四、四九
支出		Eleanor L. Burnett	
建物	一〇五九、七五	Estella L. Coe	
		Sarah M. Field	
		Leeds Gulick	

さてバーネット女史の一九二二年度(大正十二)の第一回サマー・キャンプ報告では、「次のシーズンにはより盛大に行われるであろうことが、私達を特に勇気づけてくれています。さまざまなクリスチャンの行動の中で、沢田一家の最大の関心は、現在のキャンプサイトの近くに恒久的なキャンプサイトとなるような土地を提供することと、恒久的な建物を建てる基金への多額な寄付とに向けられています。大集会室、六〇人の女学生を収容できる五個のコッティジ、それと、自然・友情・奉仕を通して心身を養なう、より豊かなキャンプ生活を見出すこと、こうしたものが私達の一九二三年度の目標なのです」と述べているが、一九二四年(大正十三)六月の *Japan Mission News* 第二七巻の中の「一九二三年度の浦富女子キャンプ」という記事では、同じくバーネット女史が「終に待望の新しい建物ができました。それはコー女史、ギューリック氏の指導によって、沢田氏の提供した土地に新築されました」と喜びに満ちた報告を行うと共に、建物の間取り、設備、利用法などがかなり詳細に述べられている。

次に現地をも含めた鳥取側の資料にふれよう。鳥取側の資料は(1)昭和四十一年十一月三十日発行、日本基督教団鳥取教会永田善治牧師編集の記念誌『コー先生』と、(2)筆者の面接による当時の関係者の口述による。(1)の記念誌は、鳥取教会で献身的活躍をし今日でも多くの信者達の脳裡に生きている米人宣教師コー女史(Estrella L. Coe, 1887-1966)の遺徳を偲び、彼女の活動に関する教会員の思い出を編集したものである。筆者が特にこの記念誌に注目したのは、コー女史と神戸女学院との関わり合いに深いものがあるからである。即ち、コー女史が宣教師として鳥取に来る直前、神戸女学院に二カ年間(一九一四―一九一六年)英語教師として在職していたことである。この時期は神戸女学院において、ソール院長からデフォレスト院長に移行する時期に当たる。コー女史が一九六六年(昭和四十二)七九歳で亡くなり、クレアモントの合同教会キングマン・チャペルで追悼記念式が行われた折、ロスアンゼルス日本人合同教会の代表者によって述べられた追悼の辞の英訳を当時既に八七歳の高齢であったデフォレスト名誉院長が行っているこ

ともお二人の間の深い交わりを思わせる。

記念誌に関する前置きが長くなったが、内容自体の信憑性はどうかであろうか。内容には二種類がある。その一は、その場に立ち合った人による当時の思い出であり、他の一つは編輯時という時点に立った諸資料の要約と記録である。従って前者はファーストハンド資料に近く、後者は完全なセカンドハンド資料である。しかし何らかの方法によって、別資料に照合できれば一層その信憑性が高まるといえよう。

記念誌の冒頭に、編集者による「E・L・コウ先生略歴」が掲げられているが、年次別の事項の年次について誤記がある。浦富のサマー・キャンプに関係を持つ年次のみに限ってみても、まずコー女史がアメリカン・ボードの宣教師として来日し、神戸女学院の教師となった年次を一九一一年(明治四十四)としているが、この年次は誤りであろう。

伝道団側の記録によると一九一一年は来日した年で、数年後に二カ年間神戸女学院で勤め、一九一六年(大正五)に鳥取駐在の宣教師に任命され、一九三〇年(昭和五)に至る間、極めて多方面にわたり、様々な活動をして、終にリューマチのために惜しまれて帰国されたのである。同女史の思い出については後述する。

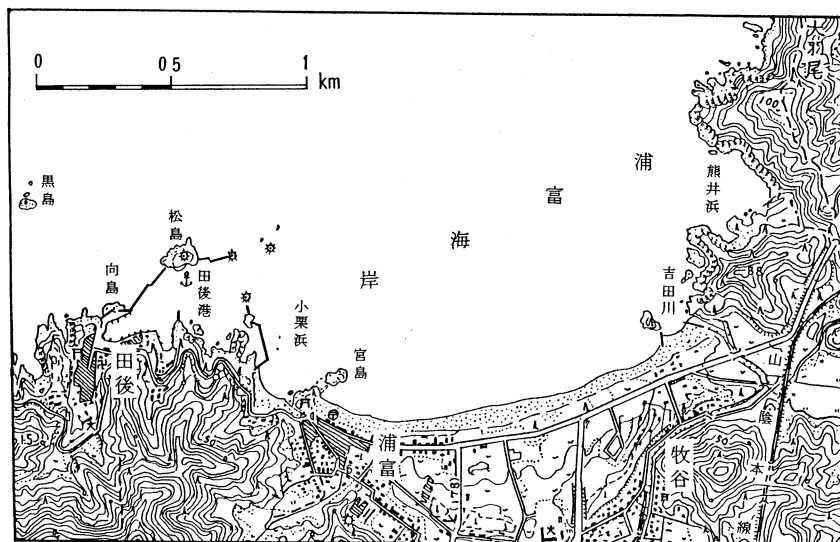
もう一カ所、同様に年次の誤りがある。北但地方が被った大震災の年次を一九二六年(大正十五)五月二十三日としているが、これは一九二五年(大正十四)が正しい。この時救援活動のために城崎に建てたバラックが、後に浦富に運ばれて再利用される経緯があり、わずか一年の年次の差も大きな意味を持つてくる。もともと、この記事を書いた編者は当時その場においてコー女史と共に救援活動をしているから、年次の誤りは思い違いによるものであろう。(城崎震災の救援活動に関しては *Japan Mission News* 第二八巻—一九二五年秋号—に詳出している。)

さて本題の浦富サマー・キャンプは、これ迄も度々述べてきたように伝道団の事業の一環であり、たまたま神戸女学院所属の宣教師のバーネット女史が伝道団より委嘱されたサマー・キャンプ委員の一人であったことから始まった

神戸女学院学生達の参加であった。もちろんキャンプの運営に当たって、神戸女学院関係の教師達の多大の尽力があったことも事実であるが、神戸女学院が全く単独でキャンプを行ったことは一度もなかった。この点については伝道団の報告によっても、また後述の鳥取側の資料や談話からも、明らかである。

次に一九二〇年(大正九)の *Japan Mission News* 第二四卷(一九二〇年十月号)にも既にその氏名が出ており、かつてのコー女史の一番弟子といわれ、鳥取バンドの中心人物であった鎌谷庄平前牧師(九〇歳)を鳥取県八頭郡家町宮内の八頭教会に訪問して、この辺に関する事情を聞いてみた。その中で最も重要な点は、同師が一九一七年(大正六)にコー女史のお伴をして、日本海沿岸の浜坂(兵庫県)から浜村(鳥取県)迄の海岸をキャンプの候補地を求めて歩いたのを覚えていたことである。やがて沢田寅藏氏の好意によってその持山が提供されたことからキャンプサイトが浦富に決まり、まもなく間口三間・奥行五間程度のバラックが建てられ、寝泊りができるようになったという。

問題は、キャンプサイトが決定した年と、キャンプが実際に行われた年次の間隔の問題である。この辺の事情を物語る記事が記念誌に出ているので引用してみよう。それは市谷春代姉の思い出である。「先生のピクニック好きな事は誰もが認めるところでしたが、特に浦富においでになる事はお好きで、お客様がおいでになると、直ぐ此処に御案内されました。私もよく御ともしたものです」とある。この記事から推して、デフォレスト院長・バーネット女史なども鳥取を訪れ、早くからコー女史によって浦富が紹介されたに違いない。市谷春代姉の思い出は更に続く。「先生はここに、キャンプ場を開きたい希望を持って、その候補地を捜されました。遂に沢田家の御好意により、小栗浜海岸、同家所有の丘状の小山をこれに当てることに決められました。早速此処の松の木立の間に、数戸のキャンプ小屋を準備されました。小山の麓に、台所に続く食堂を備え、本部が此処に置かれました。段々上に宿舎が点在し、キャンプはそこに分宿するのです。その眺望はえもいわれぬものでした。(中略)キャンプには神戸女学院・神戸女子



現在の浦富海岸

神学校・同志社大学等のミッションスクールの学生や鳥取の青少年達が一週間ずつ交代で一カ月〜二カ月をここで過ごし、その数は年間延べ数百人に上りました。(後略)」

市谷春代姉の思い出は、時間的な点で正確さに欠けるが、一つ一つの事実関係は明白にわかる。即ちコー女史が早くから浦富が気に入っていて鳥取を訪れた客をここに案内していた。それから間もなく伝道団によるサマー・キャンプのための委員会が設けられ、コー女史、バーネット女史、ハケット氏の三委員が任命されて活動を開始した。二回目のキャンプ迄に沢田本家の土地の提供で初めて小栗浜海岸の後方の山林に恒久的なキャンプ小屋が建ったことは、さきの一九二四年六月のバーネット女史の報告通りである。

次にまた記念誌の『コー先生』の中で田崎健作牧師は「ミス・コーが、わが国において、はじめてキャンプサイトを鳥取県の浦富に開設したとき、僕もアメリカから帰ったばかりで、さっそく見学に出かけた。友人の中井牧師(当時の鳥取教会牧師)とミス・コーの三人で汽車から降りて田舎のほこり道を八キロ程歩いて浦富についた。沢田氏の本家でお茶をご



ちそうになり帰路についた」と言っているのが、神戸女学院と浦富との結びつきは大正十年以降と思われる。次にまた煩わしいが、別の人の思い出を引用して開設の経緯を眺めてみる。

伊谷ます子姉によれば、「私共七、八人がコー先生のお宅を『コー先生ゲ』（コーハウスの意と呼び、そこに集り、一週間泊り込んで寝食を共にした事があった。修養会なのですが、之をハウスパーティと呼び、この一週間の生活によって純真な乙女心に、先生を通して深い神の摂理を知り、一生涯の尊い決心をする事が出来たのでした。翌年から神戸女学院等からも参加される様になり、往年の浦富キャンプが生れる様になったのでした」という。

この思い出は重要な意味を持っている。即ち浦富サマー・キャンプ以前に、鳥取のコーハウスで泊り込みの修養会（ハウスパーティ）が行われていたこと、その会にある時期から神戸女学院の学生が参加したこと、こうした鳥取コーハウスの修養会がやがて浦富のサマー・キャンプに発展したことが注目される。ただ残念なことに、ここで言う翌年というのがいつの年を指すのが不明である。しかしとにかくコーハウスが建てられ、そこで修養会が開かれ、翌年に神戸女学院の学生達の参加があり、やがて浦富サマー・キャンプに移行したというわけであるから、この間かなりの年数がたっているとみなければなるまい。さきに伝道団による浦富サマー・キャンプの開始が一九二一―一九二四年（大正十―十三）頃であろうと言ったのは、そうした年数を加算したからである。

次に神戸女学院の卒業生であり、コー女史の秘書となり、更に大学部に進学して大学生としてキャンプに参加した経験を持つ石田園江姉の思い出を掲げよう。石田姉とコー女史との出会いは一九二四年（大正十三）である。一九〇五年（明治三十八）生まれの石田姉は一九二一年（大正十）に神戸女学院の高等女学部を終え、さらに一九二四年に高等部を卒業した。同時にデフォレスト院長の推薦で鳥取のコー女史の秘書兼英語夜学校の教師ということで鳥取のコーハウスに住むことになった。そして早速にこの夏の第三回のサマー・キャンプにコー女史の助手役として参加したとい

う。重要な役目は会計を担当し、食事の献立を作ることであり、炊事の直接的な労働は浦富地区の娘さんが手伝ったという。一カ年間コー女史のもとで働いた石田姉は、翌大正十四年に再び母校の大学部に入学して、第四回の浦富サマー・キャンプには大学生として参加している。石田姉の記憶では、この頃のサマー・キャンプには神戸女学院からフィールド女史 (Miss Sarah M. Field. 一九二二―一九四一年神戸女学院在職)、ストウ女史姉妹 (Miss Grace H. Stowe は一九一〇年から、Miss Mary E. Stowe は一九〇九年から、共に一九五二年迄神戸女学院在職) の参加があったという。

石田園江姉が一九二五年 (大正十四) 神戸女学院大学部に入学したため、代りとしてコー女史の秘書となったのが宮崎 翠姉 (八〇歳) であった。この人は鳥取県立高女の出身であったが英語の勉強でコーハウスに出入りしているうちに女子青年会の中心的存在となり、石田姉の後を継ぐことになる。宮崎姉の記憶では、第四回のサマー・キャンプの指導者は鳥取在住の宣教師ベネット夫妻 (Dr. & Mrs. H. Stanley Bennett) であったという。またコー女史の親友ヒューステッド女史 (Miss Edith E. Husted. 一九二〇―一九三二年神戸女学院在職し、後に転じて神戸女子神学校の校長となった。) が訪れていたともいう。こうした証言から推すと浦富サマー・キャンプというのは極めて大らかな集団であり、そのリーダーは宣教師達の間でその年、その年で決められたのではないかと思われる。例えば宮崎姉がキャンプの世話をした大正十四年から四年後の昭和四年 (一九二九) に、大学部の学生として参加した山下薫子姉の思い出や当時の写真によると、この年のキャンプ・リーダーは L・ギューリック氏 (Leeds Gulick. かつての神戸女学院理事である。同氏の大伯母がタルカット女史。同じ米国伝道会の宣教師 Sidney L. Gulick を父に持ち、日本生れで、米国の大学を卒業後来日。青少年の野外活動の指導に豊かな経験を持つ青年である) *Missionary Herald* 誌の一九二二年九月号は紹介している。) であったという。このほかに参加していた教師はハケット氏一家 (Mr. & Mrs. Harold W. Hackett. 一九二二―一九四一年、夫君は神戸女学院の会計を担当し、夫人は専門部教員として在職)、シャイベリー女史 (Miss Lillian Shively. 一九二九―一九三〇年神戸女学院在

戦)、チットカム女史 (Miss Lucy M. Ticonb. 一九二八—一九三一年同在戦)、ストウ女史姉妹であったという。山下薫子姉の所持している当時の写真は極めて貴重な資料で、バラック建ての本部の有様や、林間に設けられた幕舎の様子もよくわかる。またその頃の村人の姿などが珍しい。

翌昭和五年になると、コー女史の帰国が生じたが、神戸女学院の学生・生徒達は続けてこの浦富サマーキャンプに参加していたことが、当時の『めぐみ』の記事に出ている。

二〇年近く続いた浦富サマー・キャンプには大勢の学生・生徒が参加し、また交代でさまざまな外国人教師・宣教師たちが加わったが、その中で、鳥取のコー女史は特別として、浦富の人びとの印象に残ったのはストウ女史姉妹であったようである。筆者が初めて浦富の地を訪れた時、当時の様子を話してくれた土地の古老、福田晴己氏(八四歳)が記憶していた外国人がストウ女史姉妹であった。このことは、浦富のサマー・キャンプではストウ女史姉妹が最も回数多く参加していたからではないかと思う。次に当時の状況や福田氏の思い出、即ち現地の人びとに映じていたサマー・キャンプの様子を眺めてみよう。

元来、浦富付近は何の変哲もない田舎の村で、田畑や山林の多くは、この地の大地主、沢田一家の所有になっていた。恐らく一〇〇ヘクタールにも及んでいたという。本家は沢田寅蔵と夫人イツ子、分家に沢田節三・簾三・退三の三兄弟があった。この中の沢田簾三が国連大使となった人で、その夫人ミキが有名なサンダース・ホームの経営者である。沢田一家は大正時代に入って、この浦富付近の観光開発を考えていたというから、外国人宣教師たちによるサマー・キャンプの計画は願ってもないことであったといえる。キャンプサイトとしての広い土地の購入が順調に進行した背景には、こうした素地があったからでもあろう。

伝道団が購入した土地は、本家の沢田寅蔵氏の所有する浦富字小栗<sup>おぐり</sup>の山林で、その海岸が小栗浜である。現在では

海岸のギリギリ迄観光用（ドライブ用）の舗装道路が出来ていて歎かわしい有様であるが、大正時代には長汀曲浦の美しい海岸であったにちがいない。ここで浦富サマー・キャンプが始まったのである。戦後、沢田ミキ夫人によって經營されていたサンダース・ホームの「海の家」が、ともすれば、大正末期と昭和初期に行われていたサマー・キャンプの跡地に出来たと思われがちであるが、全く別物である。サンダース・ホームの「海の家」は、小栗浜から二キロ余東方に位置する熊井浜に設けられたものである（八ページの地図参照）。そして現在も前記の福田晴己氏が管理している。一方、サマー・キャンプの跡地は全く夢の跡で何一つ残っていない。

話をもう一度福田老人に戻すと、「キャンプ場は松林を切り開いて作られ、そのまん中にトタン屋根葺きのバラックが建っていた。ここが本部で、いつもリーダーの外人先生が頑張っていたと思う。またこの場所で屢々浦富の青年団との交歓パーティが催されて大変楽しかったことを覚えている。何しろ片田舎に、神戸などの都会から大勢の女学生さんが外人さんに連れられて現われたのですから大変なことでした。建物は木造のバラックであったが、かなり広く、集会室・寝室と台所の区別があったので、一度に二〇〇三〇人位は泊れたと思う。（この話は、さきに引用した鎌谷庄平前牧師のいう間口三間・奥行五間の建物の内容にふさわしい。）また初めは中央に一つバラックがあるだけであったが、後には幾つかふえたように思う。（冒頭に書いたように、北但大地震の時に救援活動用に城崎に建てたバラックを浦富に運んで再利用したという事実と一致するし、浜坂保育園長をしていた高田 仲姉の想い出の記の中でも城崎のバラックを浦富に移転させて青少年キャンプ場に活用したことを述べているので、バラックの数は次第にふえたのであろう。）とにかくこのサマー・キャンプは、辺鄙だった浦富の地に新風を吹き込んだものでした」と語った。

最後に、締め括りをしておくことにする。この考証の出発当初、浦富サマー・キャンプというのは、神戸女学院の主体性において実施された新しい野外宗教教育と考えていたが、現地鳥取側の資料に当たったり、関係者の話を聞く

うちに、必ずしもそうでないことがわかってきた。鳥取教会の協力が大きく働いていることを知った。と共に浦富サマー・キャンプが、神戸女学院以外のミッションスクールや女子青年会の仲間達と合同の形式で、幾人かの宣教師の指導によって行われてきたことがはっきりした。ここ迄は明らかになったが、「いつ、誰が始めたのか」という点、また浦富サマー・キャンプの適確な開始と終了時期については、今一息というところに止まった。こうした時、米国伝道団の機関誌 *Japan Mission News* と *Missionary Herald* により当時の記事を読むことができた。お蔭で、今一息のところから一気に前進した。サマー・キャンプが伝道団の青少年野外宗教活動の一つとして、一九二二年（大正十）に発議され、浦富で発足したこと、神戸をはじめ各地の女子学生や勤労女性が、一〇〜一四日間ここに宿泊して行動を共にして大きな効果をおさめたこと、施設は年毎に充実していったことがわかった。ただキャンプの終わった年次は、戦時中の伝道団の帰国という出来事のため、他の資料から推定する以外に方法がなかった。

文末ではあるが、現地調査に当たってお世話になった鳥取教会の宮内常喜牧師、八頭教会の鎌谷庄平前牧師、兵庫県曽根教会の岡本加都夫牧師に、心から感謝の意を表したい。また現地浦富の案内をして戴いた岩美町役場の方々にも厚くお礼を申し上げる。